

氏 名：西 田 朋 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 3 7 号

学位授与年月日：平成 2 2 年 3 月 1 6 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：医療現場における新卒看護師の支援

－ピア・グループの実践を通して－

Support for Newly Graduated Nurses in Clinic Settings

－ An Action Research on Peer Group －

論文審査委員：主査 濱 田 悦 子

副査 武 井 麻 子

副査 筒 井 真 優 美

副査 守 田 美 奈 子

副査 鶴 田 恵 子

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 【研究の背景】

就職後 1 年以内に離職する新卒看護師が 9.2%にのぼる現状や先行文献で明らかにされている新卒看護師の職場での居場所がないという体験から、単に看護技術への自信がないというよりは、深刻なアイデンティティが揺らぐ体験をしていることが明らかとなった。そのため新卒看護師は、現在多くの医療施設で実施されている看護技術の獲得に重点をおいた多くの研修よりも、むしろありのままの自分が受け入れられる情緒的支援を通して無力化している状態から力を取り戻し、看護実践を培う基盤を確かなものにしていくことが必要である。それを可能にするのが、ピア・グループであるが、新卒看護師のピア・グループに実践的に取り組んだ研究は数少ない。

### 【研究目的】

本研究は、医療現場におけるフィールドワークと並行して新卒看護師によるピア・グループを実施し、そこでの語りと病棟での観察を通して、彼らが現場でどのような体験をしているかを明らかにするとともに、グループで生じる参加者同士の相互作用が彼らの語りや体験の受け止めにどのような変化をもたらすのかを明らかにする。また、そこから、新卒看護師に対する医療現場での具体的な支援についての示唆を得る。

### 【研究方法】

新卒看護師を参加者（10名）とし、研究者がファシリテーターとして参加するピア・グループの実施を主要なアクションとし、新卒看護師の配属されている部署での参与観察を併用した質的研究である。研究期間は 2008 年 4 月～2009 年 3 月は予備的フィールドワーク、本調査は 2009 年 4 月～9 月だった。ピア・グループは本調査期間に開催したためこの期間のデータを分析対象とした。ピア・グループは「自由に何でも話せる場」として設定した。週に 2 回、1 回は 45 分間

として定期的開催した。配属部署での参与観察は、研究参加者の勤務やピア・グループの開催日を考慮して決定した。

#### 【倫理的配慮】

研究にあたって研究参加者には、参加は自由意志であること、匿名性の保障、データは研究以外では使用しないこと、結果の公表と還元を行う事を記載した文書を用いて、口頭にて参加への協力を求めた。論文では仮名を使用し、個人を特定できないように配慮した。研究は、研究協力病院と日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会に承認を得た上で実施した。

#### 【結果】

ピア・グループは50回開催し、参加状況や語られる内容、参加者同士の相互交流の観点からⅢ期に分類できた。

第Ⅰ期（1回目～5回目）は“一体化を求める”時期だった。この時期には、看護師になった自分に戸惑っていることについての多くの不安が、居場所がないという語りにも示された。参加者の居場所のなさ、病棟で体験しているシャドウイングや任される業務と関連していた。第Ⅱ期（6回目～25回目）は、“思いの違いがはっきりと語られはじめる”時期であった。グループでは、患者や同期との関係の難しさが語られるとともに、患者理解の進展が起こることもあった。参加者が最大だった回では、入職してから体験した悔しさを話すうちに自分たちの成長にも気づく語りが生じた。第Ⅲ期（26回目～50回目）は、“語ることで自分の気持ちを整理し、互いを理解する”時期であった。できる業務が増加してきたことや、先輩との関係が変化してきたことが語られるとともに、参加者同士が率直に意見をぶつける中では、参加者相互のリフレクションが生じ、そのリフレクションが参加者個々の自己理解につながるような相互交流が生じた。

参加者は、ピア・グループをく自分の話をきいてもらえ、他者の話を聞き、エネルギーを得られる場>>助けを求める場>>存在自体に意味がある>>と捉えていた。また、<研究者である“私”との接点を求める>>参加者の姿もあった。

結果の最後に、支援に困難を伴う新卒看護師の事例を紹介した。

#### 【考察】

半年間のグループのプロセスから見えてきた新卒看護師の変化は、個人の成長が対人関係の発達の中にあるのと同様のプロセスをたどっていたということ、また彼らの支援には時期が意味をもつ、ということだった。新卒看護師は、青年期に近いことに加え、看護師という職業アイデンティティを獲得していくという発達課題を抱えている点において、青年期に似た課題をもつ。アイデンティティを獲得していくためには、自分を仲間として受け入れてくれる集団に帰属し、集団同一性をまず獲得する必要があるが、それが彼らにとっての今回のピア・グループの意義であった。

新卒看護師が入職後、何もできない自分という現実と直面して最初の危機を乗り越えるためには、仲間とのつながりの中で自分を取り戻すことが必要である。また不安を通して一体化していた新卒看護師が徐々に分化していく時期は、再びアイデンティティが揺らぐ時でもあり、再度同期とのつながりと、抱えている不安を吐露できる機会が必要だった。また、新卒看護師の辿るプロセスは一様ではなく、個々を支えていくことが重要である。また、新卒看護師から不平不満がでてくるというのは、彼らが成長している証であり、さらなる成長を促すためには新たな対応の検討が必要である。

さらに自分の気持ちに目を向けていく機会や能力の育成が、現場や基礎教育においても必要不可欠であることが示唆された。

## 論文審査の結果の要旨

2009年7月に「保健師助産師看護師法及び看護師等の人材確保の促進に関する法律の一部を改正する法律案」が成立し、卒後臨床研修が「努力義務化」となった。新人看護師に対する研修については、看護実践能力の問題から看護技術を中心として議論されている。しかし、研究者は新卒看護師の抱えている問題が技術の問題だけでなく、別の観点からの支援も必要ではないかという問題意識から、本研究に取り組んでいる。具体的には、院内での参与観察を続けながら、ピア・グループに実践的に取り組み、病棟とグループでの観察や語りから、新卒看護師の体験を明らかにすると同時に、グループで生じる参加者同士の相互作用が彼らの語りや、体験の受け止めにもどのような変化をもたらすのかを継続的に観察したいと考え、研究を行っている。そして、さらに医療現場における新卒看護師には、情緒的支援の一つの方法として、就職直後から半年間にわたりピア・グループの実践に取り組む一方、新卒看護師の配属部署でのフィールドワークを併用して彼らの体験を包括的に捉え、まとめたものである。

ピア・グループの語りの変化からは、新卒看護師が半年間に、同期の仲間と一体化していた状況から個別化していくプロセスを明らかにした。さらに新卒看護師が他者と一体化する現象が、彼らが抱えきれないほどの大きな不安にさらされている事を意味し、ピア・グループを通して誰かとつながっている感覚を得られることは、彼らにとっては安心感にもつながる大切な感覚となっていることを明らかにした。彼らがアイデンティティを確立していくには、まず集団同一性を獲得する必要があるが、危機的な状況や混沌とした現象に直面した場合でも、ピア・グループがその助けになっていた。彼らは受け止められると再び力を携え、実践の場に足を運び、学びを進めていくことが出来、グループは彼らにとっての安全の基地になっていたことを示した点は評価できる。

さらに、ピア・グループでは参加者同士の活発なやりとりのなかから自己への気づきが生まれることも明らかにしている。こうしたやりとりは、彼らが一人の“個”として互いを認め合うようになり、アイデンティティが揺らいでいた状態から、確かなアイデンティティの感覚をつかみとったからこそ生じた結果と考えられる。このようにグループで生じた、彼らの個人的側面と対人関係の側面での成長を具体的に示した点は本研究のオリジナリティであると考えられる。

努力義務化された看護師の卒後臨床研修が目前に迫る中、研修という枠組みだけでは、深刻なアイデンティティの揺らぎを体験している新卒看護師を支援するには限界があること、個々をいかに支援していくかということが彼らのアイデンティティの確立には欠かせないことが本研究から示唆された。現在取り組まれている多くの研修も必要だが、目の前にいる新卒看護師が何を感じ考えているのか、それを知ることこそ、彼らが必要としている支援が見えてくることを強調したい。

最後に、評価を伴わない情緒的側面への支援、かつ、技術的支援と双方向からの支援があつて

こそ、新卒看護師の個人的な成長と看護師としての成長が促されることにほかならないことを提言したい。新卒看護師を支援するということは彼らが自分らしくいられるように支え「成熟した依存関係」の成立を目指すものである。そしてその過程において安心できると感じられる仲間やファシリテーターが存在する一定の枠組みのあるピア・グループのような場所が必要となるのである。

博士学位論文審査専門委員会では、審査の結果、本論文を学位規定第3条により、博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。